第二十四講　古文の読解⑦

Step 1

一　次の文章を読んで、後の㈠～㈣の問いに答えなさい。

城（じやうの）陸奥守泰盛（むつのかみやすもり）は、A さうなき馬乗りなりけり。馬を引き出（いだ）させけるに、足をそろへて閾（しきみ）をゆらりと越ゆるを見ては、「是（これ）は勇める馬なり。」とて、鞍（くら）を置きかへさせけり。又、足を伸べて閾に蹴（け）あてぬれば、「是は鈍くして、あやまちあるべし（あるにちがいない）。」とて、B 乗らざりけり。

道を知らざらん人（その道を極めていない人）、かばかり（これほど）［　　］なんや（だろうか）。

（「徒然草」より）

（注）城陸奥守泰盛……鎌倉時代の人。
閾……敷居（しきい）。
鞍……人を乗せるために馬の背に置く道具。

㈠　文中＝＝「そろへて」を現代仮名遣いで書きなさい。

［　　　　］

㈡　文中A――「さうなき」は「並ぶ者がいないほど優れた」という意味になります。漢字を用いた場合の、この意味にふさわしい書き表し方として、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

ア　送無き　イ　想無き　ウ　早無き　エ　双無き

㈢　文中B――「乗らざりけり」とありますが、泰盛がこの馬に乗らなかったのは、この馬についてどのように判断したからですか、簡潔に書きなさい。

㈣　この文章の最後の一文は、泰盛の行動を踏まえたまとめの文となっています。文中□に当てはまる語として、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

ア　慌て　イ　怒り　ウ　恐れ　エ　怠け

【群馬県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

注(1)亀山殿（かめやまどの）建てられんとて、地を引かれけるに、大きなる蛇、数も知らず凝（こ）り集まりたる塚注(2)ありけり。この所の神なりといひて、ことのよしを
（お建てになろうとして、地ならしをなさったところ、　数えきれないほど集まっている　神である　事の次第を）

まうしければ、「①いかがあるべき」と勅問（ちょくもん）ありけるに、「古くよりこの地を占めたる物ならば、②さうなく掘り捨てられがたし」と
（お知らせしたところ、　上皇がお尋ねになったので、　この土地を居場所としているものならば、　むやみに掘り起こしてお捨てになることは難しいです。）

皆人まうされけるに、この注(3)大臣（おとど）一人、「王土にをらん蟲（むし）、皇居を建てられんに、何のたたりをかなすべき。鬼神注(4)はよこし注(5)まなし。
（その場にいた人々は皆返答いたされたが、　上皇が治める土地にいる生き物が、　お建てになる時に、　何の災いももたらすはずがありません。）

③とがむべからず。ただ皆掘り捨つべし」とまうされたりければ、塚をくづして、蛇をば大井河に流してけり。さらにたたりなかりけり。
（（蛇は）決して責めるはずがありません。　掘り起こして捨てるべきです。　進言なさったので、　流してしまった。　まったく災いは起こらなかった。）

（「徒然草（つれづれぐさ）」より）

注(1)　亀山殿……後嵯峨（ごさが）上皇が造営した宮殿。
注(2)　塚……土が小高く盛り上がっているところ。
注(3)　この大臣……亀山殿の建設の責任者。
注(4)　鬼神……本文一行目の「神」と同じ。
注(5)　よこしま……道理に外れた行い。

Step 2

問一　＝＝線部を現代かなづかいに直して書け。

Step 2

問二　――線部①について、上皇はどういうことを尋ねているのか。最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　蛇をどのように扱えばよいのかということ。
イ　どうして蛇が集まっているのかということ。
ウ　どれくらいの数の蛇がいるのかということ。
エ　どのような姿形の蛇であるのかということ。

Step 3

問三　――線部②について、人々がこのように言った理由を説明した次の文中の空欄にあてはまる内容を、本文中（現代語訳は含まない）から［1］は**五字**で、［2］は**三字**でそれぞれ抜き出して書け。

蛇は、「［1］」であり、むやみに掘って捨てるようなことをすれば、「［2］」があると考えたから。

1

2

Step 3

問四　――線部③について、「この大臣」がこのように言ったのはなぜか。解答欄に合う形で二十字以内の現代語で書け。

□ことは当然の行いであり、その結果として塚を壊されたとしても蛇がそれを責めるのは道理に外れるから。

Step 3

問五　本文において「この大臣」はどういう人物として描かれているか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　神を敬う心を持たずに信心深い人々を見下す無礼な人物。
イ　自らの危険を顧みず人々のために行動できる勇敢な人物。
ウ　筋の通った話で周囲を納得させ任務を果たす賢明な人物。
エ　他者の忠告を無視して自分の考えを押し通す強引な人物。

【長崎県】

〈Note〉

第二十四講　古文の読解⑦

Step 1

一

解答

㈠そろえて　㈡エ　㈢鈍い馬で、まちがいがあるにちがいないと判断したから。（同意可）　㈣ウ

解説

㈠語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

㈡「並ぶ者がいないほど」を、「二人といないほど」と言い換えて考える。

㈢直前の「是は鈍くして、あやまちあるべし」に注目。

㈣馬の細かい動作を見て「この馬には乗らない」と判断した泰盛の行動を言い表した語である。

口語訳

城陸奥守泰盛は、並ぶ者がいないほど優れた馬乗りであったという。馬を引き出させた時に、（馬が）足をそろえて敷居をゆらりと越えるのを見た時には、「これは気性の荒い馬だ。」と言って、鞍を（別の馬に）置き替えさせた。また、（別の馬が）足を伸ばして敷居に蹴り当てていると、「これは鈍い馬で、まちがいがあるにちがいない。」と言って、乗らなかった。その道を極めていない人なら、これほど用心するものだろうか。

Step 2・3

二

解答

問一、もうしければ　問二、ア　問三、1、この所の神　2、たたり　問四、上皇が治める土地に自ら宮殿を建てる（17字）（同意可）

問五、ウ

解説

問一、「au」は「ou」と発音するので、「まう」は「もう」にする。

問二、この上皇の質問に対して、人が「古くよりこの地を…掘り捨てられがたし」と、蛇の対処について答えていることをおさえる。

問三、1、塚に集まっている蛇を「この所の神なり」と言っている。2、人々が申し上げたことに対して、大臣が「何のたたりをかなすべき」と言ったことから考える。

問四、直前の「王土にをらん蟲…鬼神はよこしまなし」に注目。

問五、「この大臣」は「王土にをらん…とがむべからず。ただ皆掘り捨つべし」と言い、そのようにしたところたたりもなく、その考えは正しかったということから判断する。

口語訳

亀山殿をお建てになろうとして、地ならしをなさったところ、大きな蛇が、数えきれないほど集まっている塚があった。この場所の神であると言って、事の次第をお知らせしたところ、「どうしたらよいか」と上皇がお尋ねになったので、「古くからこの土地を居場所としているものならば、むやみに掘り起こしてお捨てになることは難しいです」とその場にいた人々は皆返答いたされたが、この大臣一人が、「上皇が治める土地にいる生き物が、皇居をお建てになる時に、何の災いももたらすはずがありません。鬼神は道理にはずれた行いはしません。（蛇は）決して責めるはずがありません。ただすべて掘り起こして捨てるべきです」と進言なさったので、塚をくずして、蛇を大井川に流してしまった。まったく災いは起こらなかった。